

動物介在介入（アニマル・セラピー）コーディネーター②
～動物を理解するための知識と技術～

株式会社アニマルアシステッド
代表取締役 今木康彦
獣医師/社会福祉士

動物介在介入を実際に実施していくためには、人のことと動物のことの両方を理解するコーディネーターの存在が必要である（図1）。そのコーディネーターが習得する必要がある基本的な知識と技術について、人においては前回述べた。今回は、動物を理解するための知識と技術について述べていくこととする。

1. 動物を理解するための知識と技術

動物介在介入を実施するうえでどの動物種を介在させていくのかは、プログラムによって選ばれる。コーディネーターは、選ぶ動物種についての知識とその動物と関わるための技術を持ち合わせる事が求められる。ここでは、一番身近で最も介在動物として選ばれている犬について述べていくこととしたい。犬を理解するために必要な主な知識と技術は図2の通りである。

2. 人と犬との関係

旧石器時代、人は動物を狩猟し植物や果実を採集する移動生活をしていた。このころからすでに人は幼少の哺乳動物を飼育していたようである。しかし、幼少期の哺乳動物は親子関係と似た関係性で人と関係を保ち従順なのだが、動物種特有の行動の発達によって多くの哺乳動物は成長すると野生動物として自立し人から離れていった。そのような中でも犬は自ら人に近づき人もそれを許し、家畜となったのが今から15,000年くらい前と言われている（順化）。おそらくどちらも社会的な動物であったため、犬の中でも犬社会で順位の高い“従順”な個体が人の側に居着くことで生きるすべを見つけたのであろう。人は犬と共に狩りをし、そのおこぼれを犬がもらうようになる。また、移動生活をしていた人は昼に活動する哺乳動物であり多くの哺乳動物は夜行型であるため、夜は怖くぐっすりと眠ることは難しかったであろう。そのような時に犬と生活圏を共有することは、外敵の侵入を犬が先に察知してくれる“自然の警報装置”のごとく番犬の役割をしてくれ、人に“安心感”を与えてくれる存在とになっていったのではないだろうか。現代においても犬と一緒にいることで「ほっとする」といった“安心感”を感じる人は多く、人と犬が出会い一緒に暮らし始めた狩猟・採集社会からずっと今も変わらずに続いている（図3）。

3. 動物福祉

(1) 動物福祉の歴史の概要

1822年イギリスで牛や馬などの扱いに対して「家畜の虐待及び不当な取扱いを防止する法律」（マーチン法）が制定された。1840年イギリスのヴィクトリア女王のもと王立動物虐待防止協会（RSPCA）が設立されて動物愛護運動が起こった。しかし、このような中でも家畜への虐待行為は行われており、1964年にイギリスの畜産における家畜飼育の虐待を批判したルース・ハリソンの『アニマル・マシーン』が出版された。これにより、翌年イギリス政府はノースウエールズ大学ロジャーブランベルを委員長とした農業動物福祉審議会を発足し、ブランベルレポートとして答申した。ブランベルレポートには「すべての家畜に、立つ、寝る、向きを変える、身繕いする、手足を伸ばす行動の自由を与えるべき」という基準を提唱した。こうした動きを受け、家畜の劣悪な飼育環境を改善させ、1993年に動物福祉の具体的な定義として「5つの自由」が定められた。そして、世界獣医学協会の「動物の保護・福祉及び行動学に関する指針」より「5つの自由」は、当初は畜産動物を対象にしていたが、すべての動物に拡大して解釈され、世界中で現在認められている（図4）。

(2) 犬の動物福祉

1) 犬種について

人が野生動物を初めて家畜化した動物が犬と言われているが、どのような動物でも家畜化できるわけではない。家畜化するためには、少なくとも3つの条件が必要とされている（図5）。犬はリードに繋がれたりゲージに入れられたり屋内で飼育するなど行動制限ができ、人が作ったドッグフードを人の都合のいい時間に与え、そのような環境下におかれても人為的に繁殖することが可能な動物である。産業動物はこの条件に当てはまるが、動物園動物をみるとこの3条件のどれかが当てはまらず家畜化することがどれほど難しいのかが理解できる。こうして家畜化されていくと様々な身体的特徴が表れてくる（図6）。家畜化の特徴の中でも特に犬は頭蓋骨や鼻の短縮化および歯の短縮化が強く表れ、さらに繁殖季節のリズムが崩壊し多くのイヌ科動物の性成熟期は1歳半から2歳くらいに対して小型犬などは6カ月から8カ月齢くらいまで短くすることができてしまったのである。この身体的な特徴に伴い犬の心までも変化が表れネオテニー（幼体成熟現象）も犬の特徴といえよう。このように犬は家畜化の条件と特徴を見事に兼ね備えてしまったがゆえに、1800年代のイギリスのヴィクトリア朝時代に犬種の多くが作出され、それとともに現在の犬の飼育様式が出来上がったのである。犬の作出は現在も続いており、犬種標準を目指すあまり遺伝的多様性が奪われ体に無理が生じ先天性疾患を抱えた犬たちが生まれ出てきてしまっている。犬を作出

した人の責任は重く、「5つの自由」を尊重し終生飼育していくべきである。しかし、犬種のいいところもある。それは犬種によってある程度どのような性格や行動の特徴を持ち合わせているのかを予測することができることである。そもそも犬種はどのように作られたのか。まず犬の祖先であるオオカミの狩猟手順を図7のように9段階に分けることができる。この9段階のうちどの行動特徴を強めるかによって大きく4つの犬種が作られた。②と③と④の行動を強く特徴づけた犬種がハーディング・ドッグ（護羊犬、牧羊犬、牧畜犬）（図8）、②と⑨を特徴づけた犬種がガン・ドッグ（鳥猟犬）（図9）、①と④を特徴づけた犬種がハウンド（獣猟犬）（図10）、⑤と⑥を特徴づけた犬種がテリア（害獣捕殺犬）（図11）である。これらの行動特徴はとても強い欲求として各犬種はもっている。例えば、テリアは咬みつきたいという欲求が他の犬種よりも格段に強い。“ソフトマウス”とも呼ばれるくらいハンターが撃ち落とした鳥を優しく咬み運ぶことを得意とするガン・ドッグとテリアがもし喧嘩をしたならば、たとえ体格差があっても殺傷能力が高いテリアはガン・ドッグを咬み殺してしまう可能性がある。しかし、4つの犬種に共通する特徴でもあるが、テリアであっても解体して食べるという行動特徴は低く抑えられて作られている。テリアにとってそれほど咬みたいのだから、咬ませないのではなくおもちゃなどを咬ませて咬みたい欲求を満たしてあげる遊びを取り入れるようにしていけるとよいであろう。

2) 「5つの自由」について

「5つの自由」について説明をしていきたい。まず「①飢えと渇き、栄養欠如からの自由」において、多頭飼育や飼育放棄、子犬工場（パピーミル）といった状況で十分な食事や水が与えられないことがすぐに思い浮かべられよう。その他にも、日本の犬の生体販売において購入者は小さい子犬を選ぶ傾向が強いため、あるペットショップの店員が早期離乳をさせて固形のフードに切り換え、しかも意図的に食事の量を減らして大きくさせないようにしているなどを聞いたことがある。犬に十分な食事と新鮮な水を与えることは当たり前のことである。

「②不快からの自由」、「③痛み、傷害、疾病からの自由」、「④恐怖や苦悩からの自由」については、理解しやすいと思う。

「⑤正常行動を表現できる自由」というのが分かりづらく、飼い主も意識をしていないことがよくある。生後4週から8週齢まで親や兄弟そして人などに関わるなど犬の心の成長の基礎をつくる社会化期として大切な時期である。しかしペットショップでの生体販売では、早期離乳後感染症防止などの理由により子犬を1頭ずつ隔離した状態で飼育し購入者のもとへいくこととなる。早期離乳は子犬の探索行動ができないなど脳の発育に影響があるといわれている。また、離乳を済ませた生後8週齢以上の子犬はその後社会化を継続し成長していくのだが、混合ワクチンの接種が終了する4ヵ月齢ぐら

いまで他の犬や人などと接触させないことがある。このように過ごしてきた犬の場合、飼い主以外の人や犬などに対してどのように関わっていったらいいのか分からないという恐怖心さらには攻撃行動を示すようになってしまい、飼い主に過剰に依存してしまうこともある。

さらに、犬の社会秩序として、上位個体、中間個体、下位個体とオオカミほど厳格ではないが大きく3つの階層に分けられる。上位個体は、威厳行動が見られる生まれ持ったリーダー犬である。リーダーになりたい犬との関わり方は、愛情をもって明確な上位行動を示し服従心を育てる必要がある。この関係性を築き信頼関係ができれば頼れるパートナーとなり、犬ぞりにおけるリーダー犬と人との関係性はその例といえよう。中間個体は、上位個体がいれば自らお腹を見せるなどの服従行動を示すが、自信や自己主張も持ち合わせ友好的な犬である。そして、服従心の強い下位個体であるが、どのような相手でも自分から下位へ入っていきこうとし、自信がなく自己主張も乏しく、上目遣いで肩を落としたような独特な仕草をとるような犬である。中にはオスなのにメスのような排尿の仕方をする個体もいる。ペットショップでは中間個体と下位個体が販売されていることが多く、中間個体は人にも従順で飼いやすい犬である。一方、服従心の強い個体は人のかかわり方次第で大きく変わってしまう。ペットショップから購入しまだ信頼関係が築けていない状況で多くの飼い主は下位個体に対して愛情を注ごうとする。おそらく多くの飼い主は、子犬の顔に飼い主の顔を近づけたり、子犬の首の後ろを撫でたりする行為をしている。下位の子犬にとって飼い主の顔が近づく、とくに目と目が近づくことは恐怖でしかない。また、首の後ろを撫でられる行為は、中間個体同士の遊びを見ているとよく分かるのだが、“上下関係ごっこ”をしているとき相手の首の後ろを咬んだり顎を乗せたりし、咬んだり顎を乗せたりしている方が上位となる。このことを理解しないまま飼い主が服従心の強い子犬の首の後ろを撫で続けると、飼い主は愛情表現を示しているつもりでも、子犬は心の中で「ごめんなさい、ごめんなさい、私は下位でいいです、それ以上撫でなくても下位と分かっています…」と叫び続けている。いよいよ子犬自身の心が壊れる寸前まで来て初めてその子犬は飼い主に対して自分の心を守るために唸ったり咬んだりするなどの行動をとる。今まで愛情を注いできた飼い主は驚き子犬から手を引き、この時点から子犬は飼い主に対して唸ったり咬んだりする犬に豹変してしまうのである。このようなケースは、動物病院にて「待合室相談」をしていると飼い主の方からよく聴き相談されることが多い。下位個体の犬に対しては、視線を合わせずに犬の横にしゃがみ、胸や背中など犬の心地いい場所を触り、おもちゃで引っ張り合いの遊びでは勝たせるなどして褒めて自信を持たせるようにしていきながら信頼関係を築いていく。信頼関係ができれば中間個体と同じように自信を持った友好的な犬へと成長していく。

このように犬の行動の知識と技術がないと知らずに犬の福祉を奪ってしまうこととなる。

4. 飼育管理

(1) 健康管理

体温・脈拍数・呼吸数・血圧などのバイタルサイン、ワクチン予防、外部寄生虫予防、内部寄生虫予防、デンタルケア、トリミング、グルーミング、栄養管理などの知識と技術は必要となる。

(2) しつけ

犬について言えば、社会化期をすごさせ、他の犬や人や音や物など外部との環境に慣れさせる。とくにその犬が将来的に接触する可能性がある人（子ども、高齢者、障がい者など）や物（車いす、杖、自動車、施設など）を1歳になるまでに何回か接触させて経験をさせておくことが後々の動物介在介入の活動時に大切となってくる。また、体をどこでも触れるようにする。そして、トイレやハウスやキャリケースのトレーニング、アイコンタクト・オイデ・オスワリ・フセ・マテなどのトレーニング、お散歩トレーニングなど基本的なしつけを犬と楽しみながら信頼関係を築いていく。

犬はネオテニー現象という特徴をもち、心においては筆者自身の感覚では耳の垂れた犬はオオカミの1ヵ月齢くらいの心をもち“従順”であるのに対し、耳の立った犬はオオカミの2ヵ月齢くらいの心をもち“自立心”を少し持ち合わせているのではないかと思っている。この1カ月の差は大きく、耳の垂れた犬は人との関係性は親子関係に近く、耳の立った犬とはパートナーの関係に近いと思われる。このことだけでもしつけの方法は変わってくる。例えば、耳の垂れた犬は首の後ろを少し強くつまむだけで叱られたことが伝わる。これは母犬が子犬に叱るときの模倣行動ともいえよう。一方、耳の立った犬を同じような行為で叱ろうとしても伝わらずむしろ反撃してくる可能性がある。耳の立った犬は自立心が芽生えており、そのしつけは猫のしつけに近く決して叱らずほめながら結果的にいいことだけをしているようにもっていく手法がいいと思われる。

いずれにせよ犬は生涯遊ぶことができる動物であり、遊ぶことがなによりも大好きなのが犬である。しつけや様々なトレーニングも遊びの延長線上にあるようにしていき、遊びを通して人と犬が楽しい時間を共有することがとても大切となってくる。

その他の動物においても、しつけあるいはハズバンダリートレーニングをしておくことで人との友好的な関わりを保つためにも大切となる。

(3) 公衆衛生

動物の感染症の知識を得ることで、消毒や滅菌の知識と技術の重要性が理解できる。また、動物介在介入では、人と動物が関わることから、人獣共通感染症（ズーノーシス）の知識が非常に重要となる。

動物との関わりは、言葉によるコミュニケーションをとることができないため、動物が何を考え、どのように感じているのか、何をしたいのかなどを理解することは難しい。また動物に人の思いを察することを求めることもできない。動物のことを理解するためには、動物を観察し様々な情報を得て、その動物の視点に立った感覚を持つ必要がある。人のほうから動物へ歩み寄り観察や肌から伝わる感触などから理解をしていこうと努力するべきである。動物がストレスを感じていることをいち早くキャッチできることは、動物を守りなおかつ人への危害をもたらすなどの事故回避にもつながる。動物介在介入は動物が笑顔でいてもらえることで、人にいい影響をもたらすものなのである。

図1 動物介在介入の基本的な考え方

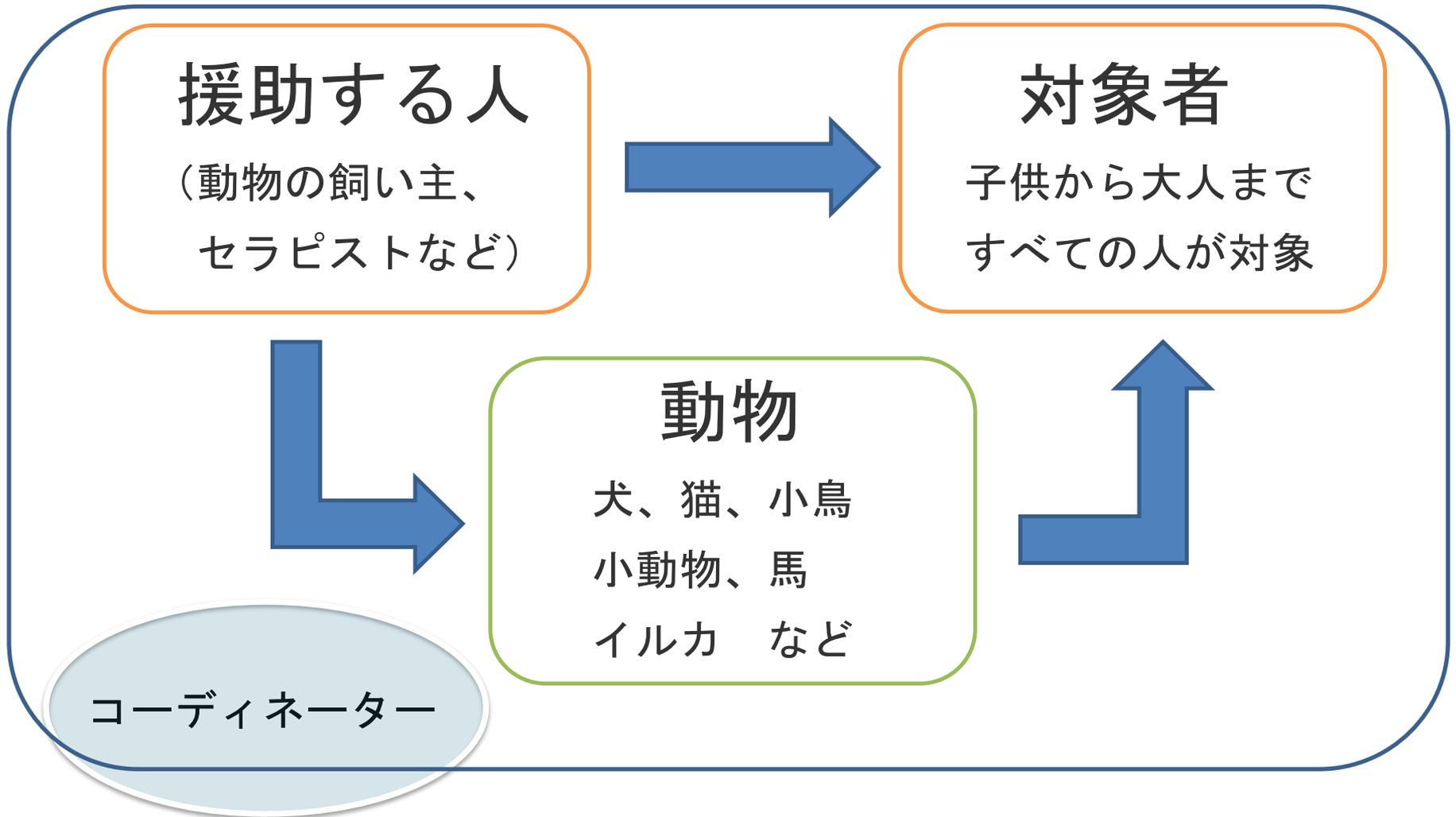


図2 動物を理解するための主な知識と技術

人と動物の関係学、動物福祉論、生態学、
行動学、解剖学、生理学、公衆衛生学、
繁殖学、栄養学、疾病学、感染症学、
飼育管理学、グルーミング、トリミング、
ドッグトレーニング、動物関連法規など

図3 人と犬との出会い

約15,000年前

人のテリトリー
＝社会的動物

犬は『天然の警報装置』

犬のテリトリー
＝社会的動物



**「順化」
犬自ら人の社会へ入ってきた動物**

図4 5つの自由(5つの解放) five freedoms

① 飢えと渇き、栄養欠如からの自由

- ▶きれいな水と健康および活力を維持するための飼料を摂取できるように用意すること

② 不快からの自由

- ▶住む場所や安心して休息できる場所を含む適切な環境を提供すること

③ 痛み、傷害、疾病からの自由

- ▶予防や迅速な診断・治療をすること

④ 恐怖や苦悩からの自由

- ▶精神的な苦痛を与えないような状態を保証すること

⑤ 正常行動を表現できる自由

- ▶十分な空間と適切な施設および同種の仲間を提供するなどその動物がごく当たり前の行動ができること

図5 犬の家畜化①

野生動物を
家畜化するための
3つの条件



① 畜舎などで飼育するなど行動を制限できること

② 人が作る配合飼料等で定時給餌ができること

③ 人為的な繁殖が可能であること

図6 犬の家畜化②

家畜化の特徴



- ①初めは小型化、後に大型化
- ②脳が小さくなる
- ③頭蓋骨や鼻が小さくなる
- ④歯も短くなる
- ⑤脂肪がつきやすくなる
- ⑥皮膚の色がうすくなる
- ⑦耳が垂れさがる
- ⑧尾が巻く
- ⑨繁殖季節のリズムがなくなる

図7 オオカミの狩猟手順

- ①獲物を追跡し、発見する
- ②獲物をにらみつけ、動けないようにする
- ③忍び寄る
- ④追いかける
- ⑤かみついて捕まえる
- ⑥かみ殺す
- ⑦解体する
- ⑧食べる
- ⑨食べきれないものは、運び去るか、埋める



図8 造られた犬種

【オオカミの狩猟手順】

- ①獲物を追跡し、発見する
- 🐾 ②獲物をにらみつけ、動けないようにする
- 🐾 ③忍び寄る
- 🐾 ④追いかける
- ⑤かみついて捕まえる
- ⑥かみ殺す
- ⑦解体する
- ⑧食べる
- ⑨食べきれないものは、運び去るか、埋める

ハーディング・ドッグ
護羊犬、牧羊犬、牧畜犬



ボーダーコリー
シェットランド・シープ
ドッグ(シェルティ)



ウェルシュ・
コーギー・
カーディガン



グレートピレニーズ



ウェルシュ・コーギー・
ペンブローク

図9 造られた犬種

ガン・ドッグ 鳥猟犬

【オオカミの狩猟手順】

- ①獲物を追跡し、発見する
- ②獲物をにらみつけ、動けないようにする
- ③忍び寄る
- ④追いかける
- ⑤かみついて捕まえる
- ⑥かみ殺す
- ⑦解体する
- ⑧食べる
- ⑨食べきれないものは、運び去るか、埋める

ポインター



ラブラドル・レトリバー

アメリカン・
コッカー・
スパニエル



アイリッシュ・
セター



ゴールデン・レトリバー

図10 造られた犬種

ハウンド 獣猟犬

【オオカミの狩猟手順】

- ①獲物を追跡し、発見する
- ②獲物をにらみつけ、動けないようにする
- ③忍び寄る
- ④追いかける
- ⑤かみついて捕まえる
- ⑥かみ殺す
- ⑦解体する
- ⑧食べる
- ⑨食べきれないものは、運び去るか、埋める

ビーグル犬



アフガン・ハウンド



イタリアン・
グレーハウンド



ミニチュア・
ダックスフンド

図11 造られた犬種

テリア 害獣捕殺犬

【オオカミの狩猟手順】

- ①獲物を追跡し、発見する
- ②獲物をにらみつけ、動けないようにする
- ③忍び寄る
- ④追いかける
- 🗑️ ⑤かみついて捕まえる
- 🗑️ ⑥かみ殺す
- ⑦解体する
- ⑧食べる
- ⑨食べきれないものは、運び去るか、埋める



ジャック・ラッセル・テリア



ヨークシャー・テリア



ミニチュア・シュナウザー